

# 学校DX戦略コーディネータ概論【Ⅲ】

## 未来を創る教育設計～カリキュラム開発の新しい視点～

### 第2講 日本の学校カリキュラム開発の歴史

安彦忠彦（名古屋大学・名誉教授）

# 第2講 日本の学校カリキュラム開発の歴史

## 【目的】

学校での「カリキュラム（づくり）」（ここでは「つくり」を「開発」と呼ぶ）について、その基礎知識としての歴史的な流れを、世界を視野に入れつつ、主に日本を中心に概観し、今後のカリキュラムづくり（開発）のための展望を得ることを目的とする。

## 【学修到達目標】

- ① 古代から現代に至るまでのカリキュラム開発の歴史的変遷を理解し、主要な教育思想や改革の影響を具体的に説明することができる。
- ② 特定の時代や教育思想に基づくカリキュラムの特徴を分析し、それがどのように学習者のニーズや社会の要求に応じて変化してきたかを論じることができる。
- ③ カリキュラム開発の歴史を踏まえ、現代の教育課題や社会的ニーズに応じた未来のカリキュラムの改善点や新たな提案を具体的に示すことができる。

## 1. 古代～中世の教育：教養と神学

古代ギリシャ：自由市民のみ、必要な教養として  
アテナイの学校(スコレー)：自由七科(三学四科)。

古代ローマ：自由市民のみ、必要な教養として  
保護者等の個人教授・学校：国家への忠誠心、自由  
学芸。

中世：上流階級の子弟中心、神学への準備教育  
大学：キリスト教神学中心、学校：古典語と自由学  
芸を、神学の基礎教育として採用。

## 2. 「カリキュラム」という用語の誕生

16世紀：

大学改革（1575年創立のライデン大学など）で、教育内容の「方法的な一般化・明確化」（どういう内容をどういう順序で履修するかの手順・方法の明示）の動き。

ラテン語 currere (走る)を語源とする「カリキュラム curriculum」が「コース（課程）」の意味で初めて大学で使用される。

### 3. 近代以降の人間観と教育の変化

17世紀・18世紀（啓蒙の時代）：

義務教育制度の登場：ゴータ公国の教育令(1642)

デカルト(1596生)やニュートン(1642生)らによる  
「自然科学」の発展 = カトリック基督教から脱却。

人間観が生来の悪(性惡説)から生来の善(性善説)へ、  
子供観が「小さな大人」から「子供独自の時期」へ。

J.J.ルソー(1712生)の消極教育思想「自然に帰れ！」

#### 4. 20世紀：「子供中心」への転換！

E.ケイ（1849生）：

「20世紀は児童の世紀！」 「教えないこと」 強調。

J.デューアイ（1859生）：

子供の活動・経験 자체を重視する「経験学習」を  
提唱し、従来の知識中心の教科学習を相対化。

カリキュラムとは「子供の学習(生活を含む)経験  
の総体」である、と定義が転換。

## 5. 現代社会とカリキュラム開発の課題

### 現代の課題：

地球環境問題 = 原爆や核原発とその放射能汚染を始めとする環境汚染、気候変動などによる地球規模の環境破壊等。

高度情報化（ICT・AI）が人間の制御能力を超える可能性 = 「2040年はAI特異点の年」との仮説。

自由民主主義の担い手たる市民性(主権者)教育の必要。

## 6. 求められる「カリキュラムの総合」

展望：

子供主体と学問研究を重んじる人間育成：子どもの興味・関心重視の探究活動と責任ある当事者意識の育成重視。

教科カリキュラム（学問）と教科外カリキュラム（経験・活動）を、目的・成長に応じて総合することが必要。

## 7. 日本のカリキュラムの歴史と概要： 江戸時代までの教育：儒学と庶民の学び

足利学校（室町時代、1439）

武家中心（儒学中心、高等教育レベル）

藩校(藩学)（江戸時代、18世紀半ば）・郷学(郷校)（19世紀後半）武士・庶民向け（儒学、読み書き・算数）

寺子屋：（江戸時代、19世紀後半急増）

庶民教育の担い手、識字率向上に貢献（読み書き・算盤）。

## 8. 明治～戦前の近代学校制度と国家主義

1872(明治5)年「学制」：

近代公教育の基本形（小学校→中学校→大学）を確立。欧米風の学問中心の教科カリキュラム。

1880(明治13)年 前年の「教育令」の改正以降：

1879年の明治天皇の「教学聖旨」を受けて儒教主義的な教科カリキュラムへ。修身が「筆頭教科」。

1886(明治19)年「学校令」公布：

森有礼文相、国家主義的な教科カリキュラムを採用。

1890(明治23)年 明治天皇「教育勅語」渙発：

近代主義を取り込んだ儒教主義的な「天皇制国家主義」教育のカリキュラムが確立。

## 9. 戦前の教科カリキュラムの骨格

国民学校令期（1941－45年 戦時下）：

国民科、理数科、芸能科、体鍊科など大教科制へ移行したが、その骨格は修身・国語・算術・体操を中心の国家主義的カリキュラム。

「(思想)教化 indoctrination」(イデオロギー的思想注入・洗脳)には成功したが、「教育」の本来の趣旨・目的から見ると、ほとんど実質的な成果を挙げずに終戦(敗戦)。

(検めて「教育」とは何か？ = 「自立と共生」！？)

## 10. 戦後の新教育体制の確立

1947年：

新憲法・教育基本法のもと、複線型から単線型学校体系へ移行。

教育の機会均等保障 = 子供全員に「共通で同等の」カリキュラムを提示。

「教科と教科外活動」から成るカリキュラムへ。  
(新教育の経験主義の影響)

## 11. 学習指導要領の始まりと法的拘束力

1947年：

学習指導要領（Course of Study）が「試案」として登場（1951年改訂まで）。教員向けのガイドブックの扱い。法的規制力なし。教員のカリキュラムづくりの裁量権を認める。「自由研究」を「教科」として導入。

1958年：

一般の法律と同様に、官報に告示され、国家基準としての法的拘束力を持つ、とされて今日に至る。

## 12. 「学力論争」と学習指導要領の揺れ

1951年改訂：

経験主義・児童中心主義のカリキュラム → 幅のある授業時数の提示：波型～で表示。

教科外カリキュラムとして「特別教育活動」導入。

1956年：

国教研：全国学力調査(テスト) → 学力低下論争  
「子供重視の経験主義」から「教科重視の系統主義」へ転換。(1958年改訂)

## 1 3. 戦後以降の主な活動・経験重視の導入

### 教科外活動の導入変遷：

自由研究（1947）（教科扱い：浸透せず）

特別教育活動（1951：学級活動・児童会活動・クラブ活動 → 特別活動1968：先の三つに学校行事等を付加）（一種の「自治活動」として体験重視）

道徳の時間（1958）

生活科（1989）（社会科・理科をやめ生活経験重視）

総合的な学習の時間（1999）

外国語活動（2008）

教科の導入変遷：(小1,2)生活科(1989)、特別の教科・道徳(2015)、(小5,6)外国語科(2020)

## 14. 学習指導要領の主な改訂の変遷 (1958年～2008年)

1958 (系統学習)

1968 (現代化) → 現代化批判 + 民間教育研究団体

1977 (ゆとり) → ゆとり教育批判

1989 (生活科導入)

1999 (生きる力、総合学習導入) → 学力低下論争

(2003 最低基準・最低時数に変更、基礎基本重視)

2008 (生きる力、授業時数増、外国語活動導入)

2017 (コンピテンシー：資質・能力、習得・活用・探究、アクティブ・ラーニング等詳細化)

## 15. 現行の学習指導要領（2017年改訂）

「生きる力」の踏襲

「主体的・対話的で深い学び」

「資質・能力」(コンピテンシー competency) の  
三要素の構造的明確化

「知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学び  
に向かう力・人間性等」

カリキュラム・マネジメント重視

「社会に開かれた教育課程」づくりを企図。

## 16. 現行改訂作業の方向性（2024年～）

2030年度実施に向けた中教審「論点整理」(2025.9)

現行の継続 + 「子供の個別最適で協働的な学び」と「高度情報化への対応」を念頭に置く。

重点が「社会」から「子供個々人」へ移動。

子供個々人の「良い生活 Well-being」を目指す当事者意識 Agency（責任性・主体性）の育成重視。

## 17. 今後のカリキュラム開発で 配慮すべき諸点 ①

引き続き：発展的に、  
「子供を未来の主権者として第一」に尊重。

「目前の子供一人のために教育すること」の徹底。

① 地球環境問題への対応：  
SDGsを含む地球環境の悪化への責任  
持続可能な状態の保持。

## 18. 今後のカリキュラム開発で 配慮すべき諸点 ②・③

### ② 核(戦争)問題への対応：

原水爆のない平和希求、核汚染(原発の放射能汚染を含む)・核戦争を起こさない世界の確立。

### ③ 高度情報化社会における人間倫理の確立：

「自己(能力)開発型」から「自己(能力)制御型」への重点移動 = 「不完全で謙虚な人間性」の自覚を基礎に、自らの行動に常にフィードバックをかけ、必要な調整を行う行動原理の確立。

# 課題

- ① 特定の時代（例：古代ギリシャ、中世、近代など）のカリキュラムを選び、その特徴や教育思想、社会的背景を分析したレポートを作成する。
- ② 特定の教育思想家（例：ジョン・デューイ、ルソーなど）を選び、その思想がカリキュラム開発に与えた影響について研究し、プレゼンテーション形式で発表する。
- ③ カリキュラム開発の歴史を踏まえ、現代の教育課題や社会的ニーズに応じた未来のカリキュラムの改善点や新たな提案をまとめた提案書を作成する。

# 第2講 日本の学校カリキュラム開発の歴史

## 【目的】

学校での「カリキュラム（づくり）」（ここでは「つくり」を「開発」と呼ぶ）について、その基礎知識としての歴史的な流れを、世界を視野に入れつつ、主に日本を中心に概観し、今後のカリキュラムづくり（開発）のための展望を得ることを目的とする。

## 【学修到達目標】

- ① 古代から現代に至るまでのカリキュラム開発の歴史的変遷を理解し、主要な教育思想や改革の影響を具体的に説明することができる。
- ② 特定の時代や教育思想に基づくカリキュラムの特徴を分析し、それがどのように学習者のニーズや社会の要求に応じて変化してきたかを論じることができる。
- ③ カリキュラム開発の歴史を踏まえ、現代の教育課題や社会的ニーズに応じた未来のカリキュラムの改善点や新たな提案を具体的に示すことができる。

# 学校DX戦略コーディネータ概論【Ⅲ】

## ～ 未来を創る教育設計：カリキュラム開発の新しい視点 ～

### 第2講 日本の学校カリキュラム開発の歴史

安彦忠彦（名古屋大学名誉教授）